

## 清末『新小説』誌における『政治小説回天綺談』 ——明治政治小説『英国名士回天綺談』との比較

寇 振鋒

### 1. はじめに

清末の雑誌『新小説』は、梁啓超の主宰によって1902年11月に日本の横浜で創刊された月刊誌である。『政治小説新中国未来記』は『新小説』の第一、二、三、四号と第七号に掲載され、その間には、玉瑟斎主人の『政治小説回天綺談』が挟まれている。『回天綺談』は『新小説』における、『新中国未来記』以外の唯一の「政治小説」という角書を持つ政治小説である。

梁啓超は「<新中国未来記>緒言」の中で、『新小説』について「『新小説』の刊行は、その発願は専ら此の篇のためである」<sup>1</sup>と明言したことがある。換言すれば、そのような功績を残した『新小説』は、政治小説『新中国未来記』を発表するために刊行したものである。それ故、政治小説が占める『新小説』誌中の重要性は、大きかったと思われる。

『政治小説回天綺談』は、1885年に加藤政之助が編訳した政治小説『英国名士回天綺談』に基づいて翻訳されたものである。しかし中国のほとんどの研究者は、この小説を「創作小説」とする。<sup>2</sup> 他方、日本の研究者は、ほとんどこの小説を「翻訳小説」に入れている。<sup>3</sup> このことから分かるように、中国のほとんどの研究者は政治小説『英国名士回天綺談』の存在を知らないと考えられよう。

この見解の相違を解決するために、加藤政之助編訳の『英国名士回天綺談』と漢訳『政治小説回天綺談』の比較研究が必要である。しかも、この小説は『新小説』誌中の外国を題材とする小説において、完結された唯一の小説である。したがって、両者の関係から見ても、小説の完備性から見ても、両作品を比較して、事実を明らかにしなければならないと考える。

## 2. 加藤政之助とその編訳の『英国名士回天綺談』

まず『英国名士回天綺談』の編訳者について述べておこう。加藤政之助(1854—1942)は明治から昭和前期にかけての政治家、ジャーナリストである。1878年に『大阪新報』の主幹として入社した。1880年埼玉県会議員に当選し、1882—1890年の議長をつとめた。立憲改進黨、進歩党、憲政党などに所属し、憲政党政調会長などを歴任した。立憲改進黨の結成に参画するなど、自由民権運動の一翼を担った。

加藤政之助は、「英国ノ制度ヲ欽慕」<sup>4</sup>していた、「イギリスの立憲君主政体を日本に行うことを目標とした」<sup>5</sup>立憲改進黨の一員として、もちろんイギリス流の穏健な立憲君主制を主張し、英国立憲君主制の原則を日本に適用しようとした。そこで、

欧州ノ歴史中最モ顯著ナル事蹟ヲ採擇シテ茶番狂言ヲ脚色シ以テ来客ノ覽觀ニ供シタリ是レ即チ英国第十三世紀政治改良ノ顛末也然ルニ此茶番狂言ハ事蹟ノ感ズベキモノアルガ為メ乎又将タ脚色其宜キニ適シタルガ為メ乎幸ニ来賓ノ大喝采ヲ博シタリ當時以為ラク此脚色ヲ基本ト為シ尚ホ第十三世紀英国政治改良ノ事蹟ヲ網羅シ其不足ヲ添ヘ其蛇足ヲ削リ敷衍潤色シテ小説ト成サバ亦頗ル世教人心ニ補益スル所アルベシト<sup>6</sup>

として、小説を創作し始めた。換言すれば、英国第十三世紀マグナカルタ(大憲章)の発布を潤飾して、政治小説『英国名士回天綺談』を書いた。

マグナカルタの発布には、次のような歴史事実がある。第13世紀の英国ジョン王は、内では暴政、外ではローマ教皇と対立して屈服し、またフランス国王と争って大陸の領土を失うありさまであった。闘い敗れて帰国したジョン王は、上下を挙げての反抗に出会った。そして貴族たちの要求によって、テムズ河畔ランニミードの中州で1215年6月15日、ジョン王は貴族たちの条項を承認した。やがて、これに基づいてマグナカルタが発布された。六十三条からなるこの大憲章は、専制王政に対する法支配の原理を確立したものとして、権利請願、権利章典などとともに、イギリス憲法の根本となった。

明治政治小説研究の権威である柳田泉は、『英国名士回天綺談』について次のように述べている。

城陽加藤政之助纂訳とあるが、如何にも英国歴史を抄出して綴り合せたようなものである。英国第十三世紀、国王ジョンがランニミードの原で貴族

に迫られて大憲章を公にする件と、その後物語とを政治小説風にしたもので、全く『経国美談』の模倣とってよい。しかし脚色も文章も、比較にならぬ拙劣なものであることだけはいっておく。<sup>7</sup>

模倣作としての『英国名士回天綺談』は『経国美談』のように歴史事実を題材として、「各種ノ歴史及憲法史ヲ繙キ其事實ヲ採擇集シ」、尚且つ、「曾テ矢野文雄君ノ纂譯ニ係ル経国美談ニ助筆セル佐藤蔵太郎氏ガ大阪毎朝新聞社ニ来リテ雑報ヲ助筆スルに合ス乃チ逐一余ガ本稿中添削セント欲スルノ點ヲ指示シ氏ニ執筆ノ事ヲ囑シ」<sup>8</sup>たうえて、脱稿した。

この小説は、十五回にわたり、1885年5月、世に問われた。付録には、加藤政之助の友人北畠治房に所蔵される原文「大法典」（大憲章）縮図の写しとその由来の説明および日本語訳の六十三条の英国「大法典」がある。本人の「自序」以外には、尾崎行雄、箕浦勝人のそれぞれ書いた「序」がある。小説の本文には、八つの挿絵がある。そのほか「目録」と「本文」の間に、「ジョン王ノ肖像」の挿絵がある。小説は倒置法によって、現在の「強大富盛」の英国から七、八百年前の英国をさかのぼっていく。

暴君の国王ジョンは、王位を継ぐべき正統の皇子アーソルに取って代わって王座に登った。内では虐威を振るって人妻を奪う。愛国弁士ウィリヤム・デ・アルビネーは政府を非難した演説をしたので、五年の禁固を言い渡された。妻アーンは官吏の凶暴に反抗して危難に遭っていた際、無名壮士に助けられた。志士ガルバリーも、演説をしたために陰で奇襲されて、凶徒数人を殺した。逃亡中、美女フラワーを助けて、フラワーと婚約をする。ジョン王は仏王と戦端を開いて、完勝を得た後、贅沢三昧に耽った。皇子アーソルは水底に沈められた。愛国志士が四方に蜂起して、正義を求める貴族が人民と結合し始めた。改革党は、無道な官吏から人民の自由権利を保護する、先王ヘンリー第一世から与えられた「勅許状」を某古刹から得た。有志者は一致協力して政治の改革に従事すべき同盟を結んだ。ジョン王は仏王に援助を求め、改革党は困難に直面する。改革党中の錚々たる人々は、急激なる処置を施すことが不利であると悟って、暫時は持重の計を講じ、好時機の到来を待つことに決定した。ウィリヤム・デ・アルビネーの妻アーンは、主人を助けてくれる英雄に出会える夢が現実となり、ガルバリー、フラワーの兄ロースピーチ、ロックベール三人の志士に知り合った。英雄志士が集合して画策し、弁士ウィリヤム・デ・アルビネー

は遂に救出された。国民が蜂起し、ジョン王は強いられて、大法典（大憲章）を人民に授けた。

日本の立憲改進黨は、「順正ノ手段ニ依テ我ガ政治ヲ改良シ、着実ノ方便ヲ以テ之ヲ前進スルコト」<sup>9</sup>をうたい、その綱領の第一条は「帝室の尊嚴を保ち、人民の幸福を全うす」<sup>10</sup>であった。そのため、小説も急進的な手段をとることなく、穏和なハッピーエンドに終わっている。

### 3. 『政治小説回天綺談』の訳者及び当時の思想

『政治小説回天綺談』は、『新小説』第四、五、六号（1903年6-8月）に連載された。原作中の「序」、「自序」、九つの挿絵、付録「大法典」はすべて省略された。タイトル下の署名は、「玉瑟齋主人」である。玉瑟齋主人は当然実名ではない。『政治小説回天綺談』における「玉瑟齋主人」について、ほとんどの研究者は言及していなかった。私の知る限り、ただ一人の研究者だけが、「考証する手がかりがない」<sup>11</sup>と指摘している。ただ、1903年2月に発行した、梁啓超の主宰する『新民叢報』の第25号掲載の『血海花伝奇』の作者は、同じく「玉瑟齋主人」と署名している。

伝奇雑劇の研究者は、「玉瑟齋主人」の実名が麥仲華であることを指摘している。『中国近代伝奇雑劇経眼録』は、『血海花伝奇』という雑劇の作者に対して、「麥仲華、筆名は玉瑟齋主人である。生涯は不詳であるが、光緒年間の人である。彼は伝奇を一種残している」<sup>12</sup>と簡単に紹介している。他方、『近代伝奇雑劇史論』は次のようにやや詳しく紹介している。

麥仲華、1876年（咸豊六年丙辰）に生まれ、1956年に死去した。字は曼宣、号は曼殊室主人、曼殊庵主人、璵庵、璵齋、玉瑟齋、瑟齋主人、玉瑟齋主人である。廣東順徳の生まれである。麥孟華の弟で、康有為の直伝弟子であり、尚且つ、康有為の長女同薇の婿である。秀才の出身で、1894年康有為のところに入門し、万木草堂に学んでいた。戊戌政変後、日本に亡命し、1899年6月に康門弟子の<十二人江之島の結義>に参加した。同年は康同薇と成婚した。後になって日本陸軍士官学校に留学し、以後は英国に遊学していた。民国の初めには、司法儲才館秘書を務め、後に香港電報局局長、広州電政監督等の職に就いた。『戊戌奏稿』『皇朝経世文新編』『戊戌政変記』等の著作を残している。<sup>13</sup>

同じ「玉瑟齋主人」である以上は、『政治小説回天綺談』も麥仲華の手による可能

性が大きい。以上の事実によれば、当時麥仲華の思想が、同門である梁啓超の立憲改良思想と一致するものであることは、十分考えられる。麥仲華は、梁啓超と同じく康有為の直伝弟子である。また彼は康有為の万木草堂の弟子の中で「梁、麥」と併称される麥孟華の一才年下の弟である。戊戌政変後、康有為、梁啓超に従って日本に亡命していた。以上のことから、麥仲華の改良思想は梁啓超と同質的であると考えられる。

梁啓超は、日本亡命後の1899年6月に、日本の江之島の金亀楼で「江之島の結義」の十二人組を作った。麥仲華はその結義の一人として、梁啓超と同じく、戊戌維新の失敗後の一時期、思想が少し急進的となった。その時、保皇を放棄し、革命を実施しようとしたこともあったであろう。

ただ、梁啓超の主宰する『清議報』に連載された『佳人之奇遇』及び周達によって漢訳された『経国美談』は、それぞれ日本の立憲改進黨政治家柴四朗、矢野竜溪によって書かれたものである。この『英国名士回天綺談』も同じく立憲改進黨の加藤政之助の手によるものである。明らかに、麥仲華と梁啓超は、同じく日本の立憲改進黨の穏健的な綱領に共鳴している。

麥仲華は以上の著作の他に、有賀長雄著の『社会進化論』、政治小説『佳人之奇遇』の著者柴四朗著の『埃及近世史』を訳し、梁啓超主宰の『清議報』に連載した。梁啓超はこれらの翻訳作品に対して、「名著で大作であり、参考にできる」と評価し、尚且つ、自著の「中国国債史」の後にも、麥仲華訳の『埃及近世史』の第十二章を引用し、「埃及国債史」として付け加えている。<sup>14</sup> この他に麥仲華と梁啓超の思想の一致は、『近世第一女傑ロラン夫人伝』と『血海花伝奇』から見ても分かる。

『近世第一女傑ロラン夫人伝』は、梁啓超によって徳富蘆花の『仏国革命の花——ロラン夫人の伝』を『近世第一女傑ロラン夫人伝』に漢訳し、『新民叢報』の「伝記」欄に載せたものである。<sup>15</sup> 『血海花伝奇』は、『新民叢報』の「小説」欄に載ったのであるが、実際は伝奇雑劇である。この伝奇雑劇は、第一幕「嚼雪」だけ載せ、後に中断した。麥仲華が一体何を底本として改編したのか、断言できないが、その思想的観点から見れば、梁啓超の『近世第一女傑ロラン夫人伝』によって改編したのではないかと推測される。

梁啓超は漢訳の時、ロラン夫人の急進的な思想を控えて、その急進的な言葉の後に、自身の言葉、「夫人は革命を愛するのではなく、フランスを愛するために、仕方がなく革命を愛するのである」<sup>16</sup> と加えた。

麥仲華は引き続き梁啓超の観点を受け継いでいる。というのは、雑劇に、「国

事が腐敗して、危険極まりなく、一刻の猶予も許さないという状態なので、ほとんど望みを託することができなくなった。今日の情勢を見て、我が国民はすこし血を流さなければ、決してこの汚れている世界を綺麗に洗うことができない」、<sup>17</sup> というような改編箇所があるからである。

明らかに、両者の思想は同質のものと見られ、同じく革命をやむを得ない手段とし、それが愛国の目的に基づいているとする。換言すれば、革命は目的ではなく、手段の一つであるということである。これらは、彼らが過激な革命論者から穏健的な改良主義者へ転じた現われであろう。

以上のようなことを考え合わせると、訳者麥仲華の思想は、梁啓超等改良派と同質だと十分判断できる。これは、漢訳および掲載上の主な理由であろう。

#### 4. 『政治小説回天綺談』に関する関連事実

次に、この『政治小説回天綺談』が翻訳であるか、創作であるかという問題を明らかにしたい。まず、中国の研究者の論をまとめておく。阿英は、『晚清小説目』の中で、この小説を「翻訳之部」に入れている。<sup>18</sup> 香港出版の『中國譯日本書綜合目録』には、「西洋文学の重訳小説」として収めている。<sup>19</sup> しかし、それ以後、例えば『中国通俗小説総目提要』の中では、この項目の編者唐繼珍はこの小説を「創作小説」と見なしている。<sup>20</sup> 『中国近代文学大辞典』も、同じく「創作小説」と見なしている。<sup>21</sup> 『中国近代小説大系』と『中國近代珍稀本小説』には、共に「創作小説」として収められている。<sup>22</sup> 欧陽健の『晚清小説史』では、同じく「創作小説」の中に入れられている。後に出版された『明清小説外圍論』は、また「創作小説」と見なしている。<sup>23</sup> 武禧は、「訳述小説」と指摘する。<sup>24</sup> 最近刊行の『中国近代小説編年』は「翻訳作品」と指摘する。<sup>25</sup>

中国の研究者が、この小説を「創作小説」として考えるには、三つの理由がある。一つは、中国の研究者が原作を見つけていないこと。一つは、「玉瑟齋主人」が、創作小説の体裁をとっていること。すなわち『新小説』中の翻訳小説は、翻訳者或いは訳述者の下に、「譯、譯述、述譯」が明確に付いている。そして、原作者もほとんど付けてある。例えば、『写実小説電述奇談』は「日本菊池幽芳マツ元著 東莞方慶周譯述」と記されている。それに対して創作小説は、名前の下に「著」、もしくは、名前だけである。もう一つは、「西施金闕に臨む、楊妃玉楼に上る」のような中国語の用語によって判断されている。<sup>26</sup> しかし、実際には、日本語である原作にこの言葉が見られる。

原作『英名士回天綺談』と漢訳『政治小説回天綺談』を比べてみると、翻訳上の多少の増減はあるが、ほぼ一致している。<sup>27</sup> 第十三回までは、かなり原文に忠実な翻訳である。ただ、第十四回、十五回は、ほとんど意識である。そのために、全体から見れば、麥仲華の『回天綺談』は「翻訳小説」の中に入れた方がよいと思われる。

次に漢訳『回天綺談』は「未完」であったかどうかについて考察してみよう。

上述の中国研究者の中では、唐繼珍が「實際上完結している」と指摘しているほかに、欧陽健は、「回目<憲章が公布され、改革党が成功する>及び最後の議論から見れば、實際上、すでに完結したものである」と指摘している。<sup>28</sup> ただ、唐繼珍と欧陽健は、加藤政之助の原作小説を見ておらず、内容上からの判断だったと思われる。

他方、最も信頼性の高い『新編増補清末民初小説目録』<sup>29</sup>は、この小説を「翻訳小説」に入れるが、しかし中国での「創作小説」との指摘はまたそのまま引用されている。<sup>30</sup> また、訳者の実名も、指摘されておらず、「未完」の標識としての「14回」もそのまま引用されている。

漢訳『回天綺談』の最後に「未完」と記しているので、殆どの研究者はそのまま「未完」と引用している。しかし、実は、原作の十五回を十四回にまとめて訳しただけである。付録の大法典のみ訳されていない。この小説は『新小説』誌中の外国を題材とする小説において、完結された唯一の小説として、その関係の事実を明らかにする必要があると思われる。

「未完」という語は、小説の最後に置かれている。訳者麥仲華が付録の「大法典」を訳そうとしたことは、十分推測できよう。と言うのは、加藤政之助の『回天綺談』は、付録「大法典」の最後に「回天綺談畢」と書かれているからである。実は「大法典」は、小説の成立から見れば、大憲章の発布が小説の潤色された動機としてある。一方、小説のプロットから見れば、大憲章は無関係の存在であると言えよう。原文四十一頁もある「大法典」は、量的にも多いので、小説として読むことができない。これは、訳者が結局訳さなかった理由だとも考えられる。とは言え、小説としては完訳であったと十分考えられる。この『回天綺談』の完訳という点は、十四回の最後に「且聴下回分解」（且く次回に説くを聴け）がなかったことから見ても、漢訳二年後の1905年に単行本として広智書局より刊行されたことから見ても、明らかであろう。

## 5. 翻訳上の増減訳及び改変などの部分

まず、原作と訳作の巻頭文面の特徴から見よう。

〔原作〕 第一回 季子母庇に因て實祚を踐  
暴君虐威を振て異妻を奪

方今領地は五大洲中に蔓延して管内日輪の没する時なく政治風俗善を盡し美を盡し學術工芸百般の事情を極め妙を極めて宇内万都に超絶し貿易盛んにして富は世界の市場を左右す兵備嚴にして威は万国の間に行はれ人民天賦の自由を得て王室無限の尊榮を保持し赫赫たる文明の光輝を全地球上に輝かしむるものは是れ英国なり怎麼英国は初めより斯る強大富盛の国なりしか決して然るにあらざるなり遠きむかしはさて置いて今を距ること七八百年前頃までは其が人口も最少なく僅か二百万に過ぎざる程なる欧西絶海の孤島にして

〔訳作〕 第一回 老母慈悲愛憐幼子  
新君横暴強奪艶妻

看官你繙世界地圖一看他的屬地在五大洲中星羅碁布太陽一出一沒都常照着他的国旗可不是英国吗又政治風俗工芸貿易常占一等国的地位人民則恁般自由王室也恁般一等国的地位人民則恁般自由王室也恁般尊榮文明的光輝赫赫照耀這地球上也不是英国吗原来英国不是自開天闢地的時候就是富強的七八百年前他的人口不過是二百多万他的土地也不過是欧西絶海幾個小島

上記の第一回巻頭の原文と訳文の文面から言えば、まず見られることは、原文は 259 字あるうちで、漢字は 144 字あり、全体の 55%強を占めている。原文は漢文調の文体である。第二に、259 字の原文は、178 字の中国語に訳されている。第三に、訳文の方は中国語の口語文（白話文）であり、原作に忠実な、逐語的な翻訳ではなく、意識に近いと思われる。第四に、訳文は原文の内容の順序に沿って訳されている。

当時、維新派の思想を鼓吹宣伝することが主な目的であるから、その翻訳作業は性急であったと言える。それゆえに、補足、削除、改変などがかなり散在している。上に挙げた訳例には、「看官」、最初の「英国吗」、「国旗」が補足され、「富は世界の市場を左右す兵備嚴にして威は万国の間に行はれ」、「天賦」が削除されている。

次は原文に対する補足説明、削除、改作、組替えなどを例で見よう。

A 補足説明（約 54 箇所）：

例 1、「那約翰王当初也是很糊塗的後來被這些人民逼他不得已纔行這大改革這篇就是将當時的事情從頭至尾說將出来的看官讀一回就曉得當時人民的辛苦曲



折」（第1回）（「ジョン王が改革を行ってから今日の盛大に及ぼせしということ」に対する補足説明）。

例2、原作第十二回の最後に「且く次回に説くを聴け」があるが、それ以外の各回にはなかった。それは第十二回の漢訳時にそのまま訳された。ただ、それ以外にも、すべて「且聴下回分解」（且く次回に説くを聴け）が補足されている。

B 削除箇所（約47箇所）：

例1、「互に数回の勝敗（略）止を得ず」（第1回）（アースル生母の心理描写）。

例2、「此時代の職工（略）事実なり」（第2回）（奴隸「レガータント」の種属に対する紹介）。

C 改作箇所（約33箇所）：

例1、「身は已に夫家に帰して我が生涯をば之を托し居たりける」（第1回）は「年紀尚幼還未過門」（第1回）に改作されている。

例2、「頃しも五月の下旬にして数日の間降続く五月雨の一夕殊に甚だしく恰も篠を乱すが如きことありぬ」は（第14回）「剛剛是時乃十一月下旬節交冬季令風雪嚴寒天陰月黒」（第14回）に改作されている。

D 訳文の不統一：

例1、「大僧正」は、第五回にそのまま訳されたが、しかし第九回と第十回には、「大牧師」と訳されている。

E 内容の組替え：

例1、原作第十回「然れば侠客ウキリアムデブローズが（略）疲れを休めける」は、漢訳の第十一回に移されている。

例2、原作第十一回「遂に決然其身を賭して（略）露命を失ひける」は、漢訳の第十二回に移されている。

二つとも、肝心かなめなときに、移させている。これは読者を強くひきつけるための翻訳手段として考えられる。

F 回目の組替え：

原作第十四回と第十五回が、漢訳第十四回にまとめ訳されている。

そのため、全体から見れば、第一回から第十三回までの部分は、ほとんど原文に忠実な翻訳である。第十四、十五回は、ほとんど意識であり、訳述に近い。上述のように翻訳技巧上の増減があるが、しかし原作の政治思想はそのまま受け継がれた。次にそのことについて述べる。

## 6. 『政治小説回天綺談』における政治思想

前述したように、『英国名士回天綺談』の全篇が、立憲改進黨の穩健思想を體現している。急進的革命主義に反対し、漸進的改良主義を主張する日本立憲改進黨の思想は、『新小説』時代の梁啓超等改良派の政治思想と一致すると思われる。『政治小説回天綺談』が梁啓超著の政治小説『新中国未来記』の連載の間に挟んで発表されたのには、二つの理由がある。一つは、『新小説』第三号（1903年1月）に載せる『新中国未来記』第四回を書き終わってから、梁啓超はアメリカの保皇会の招請で、アメリカで一年近く滞在していたので、小説の執筆に間に合わなかった。しかも、政治小説は当時の梁啓超にとって不可欠と考えられていた。もう一つは、『政治小説回天綺談』が『新中国未来記』における梁啓超の思想と一致していたことである。自分の雑誌に、どのような小説を連載するかという問題は、梁啓超にとって、無関心ではなかったと推測される。自分の改良思想に逆行するものは、排斥するであろう。

光緒二十八年十月<1902年11月>梁は日本で『新小説月報』を創刊し、長編寓言『中国未来記』を著した。その思想が激烈から温和に変わる兆しは、すでにほのかに見える。また、彼が主張する英国の君主立憲制度、朝廷に改革を求め、革命、破壊を放棄する論調も出ている。<sup>31</sup>

この指摘のように、梁啓超は穩和的なイギリスの君主立憲政体を主張するようになっていた。なお黄遵憲が梁啓超への手紙において、「あなたが提唱された自由民権の説は、すべて正しいと思います。あなたは、これまでの歴史に照らし、今日の程度に基づいて考えると、中国の政体は必ずイギリスをお手本にするのがよろしい、とおっしゃっていますが、我々の考えもほぼ同じです」<sup>32</sup>と表明したことからみれば、清末改良派の思想は、日本の立憲改進黨の思想に似ていると考えられる。これも漢訳した一つの理由だと考えられよう。

原作第十五回には、有志者数千人が集まって議論の中で「暴挙は革命党の最も戒め謹しむべき所にして」という穩健な論説が優位に立っている。この穩健な論説を聞いてから、「感慨激昂怒気胸中に溢るるの壯士輩」が、遂に納得して、暴挙を主張しなくなった。

この一段は訳されたうえで、「こうして行うなら、一つは、人民が塗炭の苦しみをなめるほどにはならず、一つは、外国干渉を恐れることがない。現在国力がこのように疲弊し、事態がこのように危機にあるので、若し一旦間違ったら、全

局が破滅に陥る」(漢訳第14回)と補足されている。この思想は、ちょうど梁啓超の思想と一致する。<sup>33</sup> つまり、原作における暴挙反対の思想がそのまま受け継がれたとともに、中国の国内情勢から見ても、国際情勢から見ても、その激しい暴挙がしりぞけられ、穏健思想が訳者に重視されたのである。

原作第十三回の叙述には、「冒険はむろん弊がある。しかし慎重は、それなりの弊がある。事実を見て事を行うべきというにすぎない。」(漢訳第13回)という補足が加えている。また、「宗旨をしっかりと持ち、事実を見て事を行う」(漢訳第14回)という改作された同じような箇所もある。この柔軟な言い方は、『新中国未来記』からの思想の継承であろう。『新中国未来記』における黄、李二人の勝負のつかない論争は、梁啓超が革命と非革命の間で徘徊していた証しである。しかし、梁啓超はアメリカに滞在中、アメリカの民主政治を視察してから、「共和政体の弊害が君主政体より多いことを深く嘆息した」。<sup>34</sup> そのため、「それ以後、英国の君主立憲政治に心酔し、種族革命から政治革命に転換した」。<sup>35</sup>

なお、原作最後において、寓意のあまりない原作小説の末尾が次のような訳者の議論に改変されている。

宗旨をしっかりと持ち、事実を見て事を行い、不撓不屈であれば、その大事業は彼らによって成就するというにすぎない。故に、天下の事は失敗を恐れず、やろうとしないことが最も恐ろしい。若しやろうとすれば、石を製錬して天の破れた所を繕うことができ、石を口についばんで海を埋めることができる。気概があれば、どうして成就しないことがあるか。たとえ当面は失敗するとしても、原因があつてこそ当然結果が出る。十年二十年後必ず成功の日が来る。(漢訳第14回)

これは『新小説』誌の「小説家の言を専ら借りて、国民の政治思想を起こし、其の愛國精神を激励する」<sup>36</sup> という趣旨とまったく一致する。なお、その改作は、尾崎行雄の「回天綺談序」中の次の言葉の再現と流露であろう。「このように伝えられている。人間の力は必ず大自然に打ち勝つことができる。大自然でも打ち勝つことができる以上は、人間なら言うまでもない。この書を開く者は、発奮して奮起できることが分かるはずである」。<sup>37</sup> また、この議論は、ちょうど加藤政之助の主張とも一致する。偶然かもしれないが、加藤政之助はかつて次のように述べている。「維新の革命を成就したるの志士は、其之を成就するの間幾度か水中に陥れられ、又幾度か火中に投せられたれども、不屈の精神は能

く此艱難に堪へ、遂に此大業を成せるなり」。<sup>38</sup> 明らかに、不屈不撓の愛国精神が政治目的を達成するための、必要不可欠な条件であることを呼びかけている。

以上のように、『<sup>英国</sup>回天綺談』の穩健思想は『<sup>政治小説</sup>回天綺談』にそのまま継承されている。一方、原作『回天綺談』中の「人民天賦の自由を得て」、「天生斯民を生するや賦興するに同等均一の権利を以てせり抑も此権利は決して他人の奪ふべからず又犯すべからざるものにして」という天賦人權の思想を表わす言葉も、そのまま漢訳されている。漢訳本には、補足、削除、改変、意識などの箇所が多少あるが、しかしその「急激・過激な変革を避け、あくまでも漸進主義・改進黨の立場を固執した」<sup>39</sup> 立憲改進黨の思想及び天賦人權の思想が、『<sup>政治小説</sup>回天綺談』にそのまま受け継がれている。

## 7. おわりに

以上より、『<sup>政治小説</sup>回天綺談』の訳者は麥仲華であると推察される。また、『<sup>政治小説</sup>回天綺談』は、明治日本の政治小説『<sup>英国</sup>回天綺談』から訳された翻訳小説であり、原作『<sup>英国</sup>回天綺談』出版後の十八年後に翻訳されたものである。この小説は、補足、削除、改変、意識などの箇所が多少あるが、創作小説ではなく、尚且つ完結した翻訳政治小説である。

梁啓超は「訳印政治小説序」の中で 外国の政治小説を 高く評価している。<sup>40</sup> そのため、彼は小説誌『新小説』を創刊し、政治小説を連載する。小説の力を借りて国民の魂を救い、引いては政治を改革して、国を救うという政治目的を達成するためである。『<sup>英国</sup>回天綺談』が、ちょうど彼のこの思想に一致するので、『<sup>英国</sup>回天綺談』の漢訳の掲載は、当然可能なことになった。

『新小説』誌中で、「政治小説」の角書を持つ、完結された唯一の『<sup>政治小説</sup>回天綺談』は、小説の完備性から見ても、思想の完備性から見ても注目に値するものであり、梁啓超の思想を考えるうえでも重要であると考えられる。

## 注

- 1 梁啓超「新中国未来記緒言」『新小説』第1号、1902.11。
- 2 例えば、江蘇省社会科学院明清小説研究中心編『中国通俗小説総目提要』中国文联出版公司 1990.2。孫文光主編『中国近代文学大辞典：1840—1919』黄山書社 1995.12。『中国近代小説大系』百花洲文芸出版社 1996.12。『中國近代珍稀本小説』卷1、董文成、李勤學主編、春風文藝出版社 1997.10。歐陽健『晚清小説史』、浙

- 江古籍出版社、1997.6。于平『明清小説外圍論』中国青年出版社、1999.12。
- 3 例えば、中村忠行「政治小説と清末の文壇」『明治文学全集』月報 21 筑摩書房 1966.10。清末小説研究会編『清末民初小説目録』中国文芸研究会 1988.3。樽本照雄編『新編清末民初小説目録』清末小説研究会 1997.10。樽本照雄編『新編増補清末民初小説目録』齊魯書社 2002.4。
  - 4 『東京横浜毎日新聞』社説「読日報記者主權論」『明治文化全集』第2巻「自由民權篇」日本評論社刊、1967.12、p323。
  - 5 松尾章一『自由民權思想の研究』（増補・改定版）日本經濟評論社 1990.3、p188。
  - 6 加藤政之助「回天綺談自序」『英國名士回天綺談』岡島眞七：岡島支店 1885.10。この版本はこの小説の唯一の版本である。
  - 7 柳田泉『明治初期の翻訳文学』春秋社 1935.2、p87。『明治初期翻訳文学の研究』にも所収、春秋社 1961.9、p63。二作とも翻訳文学として指摘されている。『経国美談』の模倣作と言われたように、模倣痕は確かに小説中には散在している。しかし、『英國名士回天綺談』の扉には、確かに「加藤政之助編訳」と書かれているが、翻訳小説として認め難いと思う。再び加藤政之助の自序を引用すれば、小説は「各種ノ歴史及憲法史ヲ緝キ其事實ヲ採擇集シ」たうえに、「添削」「潤飾」されたものである。尚且つ、一体どの本に基づいたか不明である。他方、『経国美談』前篇の扉にも、同じく「矢野文雄纂訳補述」と記しているし、小説中には出典も明記されているし、だが、誰も『経国美談』を翻訳小説として認めない。こうしたことからすれば、『英國名士回天綺談』は翻訳小説ではなかろう。
  - 8 加藤政之助「回天綺談自序」『英國名士回天綺談』岡島支店 1885.10。
  - 9 大久保常吉編『日本政党事情』思誠堂 1882.9、p90。
  - 10 矢野文雄「予が政党時代」『太陽』第13巻第3号臨時増刊号、明治史第六編『政党史』所収、博文堂 1907.2、p168。
  - 11 『中国近代文学大辞典：1840-1919』同注2。『回天綺談』項目の編者の于平は「玉瑟齋主人」について「考証する手がかりがない」と指摘しており、また于平は『明清小説外圍論』（中国青年出版社、1999.12。「明清小説叙録之二」）の中で、依然としてそのまま指摘している。
  - 12 梁淑安、姚柯夫『中国近代伝奇雜劇経眼録』書目文献出版社、1996.10、p147。
  - 13 左鵬軍『近代伝奇雜劇史論』台湾学生書局 2001.9、p400、401。ただ、「曼殊室主人」という号は、『梁啓超著述系年』（李国俊編、复旦大学出版社、1986.1）や『清人室名別称字号索引（増補本）』上下2巻（楊廷福、楊同甫編、上海古籍出版社 2001.12）や森川（麦生）登美江の「梁啓超の文学作品——劇本『班定遠平西域を中心に』（『清末小説』20号、1997.7）によると、梁啓超の号である。ただ、『清人室名別称字号索引（増補本）』では、麦仲華について「璉齋、曼殊庵主人」という号だけが存在している。なお、「玉瑟齋主人」という号は本書に収まられていない。
  - 14 梁啓超「本館第一百冊祝辞並論報館之責任及本館之経歴」『清議報』第100冊 1901.12。なお、梁啓超は「滅国新法論」（『清議報』第89冊、1901.8）の中でも『埃及近世史』を評価したことがある。ただ、梁啓超著の「中国国債史」（『飲氷

室合集』二十五、1904.10)の後に付けられた「埃及国債史」は「日本柴四朗の<埃及近世史>第十二章を選び訳したのである」と指摘しているが、実は、麥仲華訳の『埃及近世史』の第十二章「財政之紛乱」(『清議報』第60、61、64、65冊)と全く同じである。そのため、それは梁啓超本人の翻訳ではなく、麥仲華訳からの引用であろう。

- 15 梁啓超の『<sup>近世第一女傑</sup>罗兰夫人伝』の底本について、中村忠行は坪内逍遙訳の『朗蘭夫人の伝』に負う所大なるものであると指摘しているが(「中国文芸に及ぼせる日本文芸の影響(四)」『台大文学』第4号、1944.6)、松尾洋二は徳富蘆花の『名婦鑑』によるものであると指摘している(「梁啓超と史伝——東アジアにおける近代精神史の奔流」狭間直樹編『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房1999.10)。対照して見れば、松尾洋二の説に従うべきと思われる。
- 16 梁啓超『<sup>近世第一女傑</sup>羅蘭夫人伝』『新民叢報』第17、18号、1902.10。
- 17 麥仲華『血海花伝奇』『新民叢報』第25号、1903.2。
- 18 阿英編『晚清戯曲小説目』上海文芸聯合出版社、1954。『阿英全集』第六卷所収、安徽教育出版社2003.7、p182。
- 19 譚汝謙主編、小川博編輯『中國譯日本書綜合目録』中文大學出版社1980。この外は、樽本照雄も同じく「日本經由の欧米漢訳小説一覽」に入れている。(「清末民初の翻訳小説」『大阪経大論集』1996.5)。筆者の考えによれば、注7にすでに述べたように、もとの加藤政之助の『回天綺談』は、「創作小説」に入れるほうがいい。
- 20 『中国通俗小説総目提要』同注2、p885。唐繼珍は次のように述べている。「文章最後の括弧に<未完>と付いているが、實際上完結している。この書は英国の改革党の事を述べるが、文中には韓非子の<在牀在旁>、<孔明借得東風>、<荊軻專諸的手段>諸言葉があり、また<西施臨金門闕、貴妃上玉楼>で美人を形容するようなことから見ると、確かに創作小説である。」
- 21 『中国近代文学大辞典：1840—1919』同注2。『回天綺談』項目の編者の于平(注11の編者同)は次のように指摘している。「この書は外国の事を書くが、<孔明借得東風>、<荊軻專諸的手段>諸言葉があり、<西施臨金門闕、貴妃上玉楼>で美人を形容するようなことから見ると、訳述ではなく、多くは芸術的再創作である」。この小説を「創作小説」と見なしている。この観点は、唐繼珍からの継承であると見られる。
- 22 『中国近代小説大系』同注2。その中では、『回天綺談』は「玉瑟齋主人撰」と書かれている。また、『中國近代珍稀本小説』巻1、同注2。その中では、『回天綺談』は、「玉瑟齋主人著」と書かれている。「撰」と「著」という書き方から見ると創作と見なしている。
- 23 『明清小説外圍論』同注2。「明清小説叙録之二」中の『回天綺談』についての指摘は、注21と全く同じである。
- 24 武禧「一九〇三年小説略説(上)——晚清小説雜談13」『清末小説から』52号1999.1。

- 25 陳大康『中国近代小説編年』華東師範大学出版社 2002.12。
- 26 例えば、前注2『晚清小説史』、前注11、20、21、23は、共にこのように指摘している。「在牀在旁」、「孔明借得東風」、「荊軻專諸的手段」は、確かに玉瑟齋主人の意識である。しかし「西施臨金門闕、貴妃上玉樓」の言葉は、原文に見られるものである。
- 27 原作『回天綺談』は即ち、大阪岡島支店出版の加藤政之助編訳の『<sup>英國名士</sup>回天綺談』1885.10。漢訳『回天綺談』は即ち、『新小説』（上海書店1980年復刻版）に登載された『<sup>政治小説</sup>回天綺談』である。本稿はこの二つを底本とする。
- 28 『晚清小説史』同注2、p43。
- 29 『新編増補清末民初小説目録』同注3。
- 30 この目録の「本書の使い方」によれば、『回天綺談』は「原作を確認できない小説」の中に入っているわけで、これが「創作小説」を「誤り」と指摘していない理由であろう。
- 31 元冰峯『清末革命與君憲的論争』中央研究院近代史研究所 1966.12、p91。
- 32 丁文江、趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第2巻、岩波書店 2004.1、p172。これは、『年譜』の「1902年（光緒28年壬寅）30歳」の項目に入っている。手紙の日付は光緒28年11月（1902.12）である。
- 33 梁啓超「暴動与干涉」『新民叢報』第82号、1906.7。
- 34 梁啓超「新大陸遊記」『新民叢報』第42、43号、1903.12。
- 35 張朋園『梁啓超與清季革命』中央研究院近代史研究所 1969.6、p174。
- 36 「中國唯一之文學報『新小説』」『新民叢報』第14号、1902.8。
- 37 尾崎行雄「回天綺談序」『英國名士回天綺談』岡島眞七、岡島支店 1885.10。原文は元々漢文である。
- 38 加藤城陽「政弊改革」『立憲改進黨々報』第8号明治1893.5。
- 39 同注5、p180。
- 40 梁啓超「訳印政治小説序」『清議報』第1冊、1898.12。文章の中では「彼の米、英、独、仏、奥、意、日本各国政界の日に進むのは、即ち政治小説の功が最も大きい」と指摘している。